

第1節 発達段階に応じた「基礎的・汎用的能力」の考え方

一人一人の児童生徒に役立つ教育活動となるようにキャリア教育を実践するためには、キャリア教育の目的を理解するとともに、キャリア教育が依拠する理論的背景、及び、そこからの導き出される児童生徒観と目的の意味を熟知しておくことが不可欠である。本報告書においても繰り返し指摘してきたように、キャリア教育は、全教育活動を通して、「基礎的・汎用的能力」の育成を主軸として、児童生徒一人一人のキャリア発達を促すことを目的としている。

「基礎的・汎用的能力」を育成する活動は一つではない。ある意味で初等中等教育において実践される教育活動の一つ一つはすべて、それぞれの活動の特質に即して「基礎的・汎用的能力」の育成に寄与し、児童生徒の全人格的発達の促進に貢献しているということができる。たとえば、教科教育は、主として知的側面や身体的側面の発達を促すことを通して基礎的・汎用的能力の育成に寄与しているし、道徳教育は、主として道徳性の涵養に焦点を当てる活動を通して基礎的・汎用的能力の向上にも寄与するものである。学校におけるそれぞれの教育実践は独自の目標を持ち、関与する発達の側面が異なるように見える。しかし生徒のうちではすべての活動が相互に関連しあい、相互に影響しあっているのが現実である。キャリア教育も他の教育活動と同一の学校教育の原理に則っており、究極的目標を共有し、児童生徒が経験する他の教育実践と相互に影響し合うことで児童生徒の人格的成長・発達に寄与できるのである。

キャリア教育の実践では、「発達段階に応じる」ことが特に重視されているが、実は「発達段階に応じる」ことは初等中等教育全体の原理であり基礎的枠組みであり、基盤となる児童生徒観ともなっている。その意味でキャリア教育の実践は他の教育活動の実践の考え方と同一の基底に立つといえる。ここでは、発達段階に関して正しく理解する上で不可欠な基礎的概念の要約をしておきたい。

(1) 「発達」という概念

キャリア教育は、他の教育活動と同様、基本的に人間の発達過程に即して展開させるものである。言い換えれば、キャリア教育は、「人間は発達する」という人間観を前提として生涯にわたって展開されるものである。ゆえに「発達」についての理解は、キャリア教育のプログラムの開発はもとより、それを実践する人々が共有すべき態度と能力の基盤であると言えよう。

発達という概念は、生物発生学から出発したものである。また、人間の発達の理解に発生の諸原理を適用したところから派生した学問領域として発達心理学がある。その後多く

の研究成果により、発達の諸側面と発達メカニズムや様相、発達を促す要因などについて、多様な理論が提言されてきている。キャリア教育の実践のために発達心理学を習得しなければならないというわけではないが、「発達の段階」が意味する内容を理解するためには、発達の諸原理についての知見は必要であろう。

① 「発達」とは

心理学・教育学の言葉としての発達とは、「個人が時間経過に伴ってその身体的・精神的機能を変えていく過程であり、成長と学習を要因として展開される」（広辞苑）ことを意味する。この定義より、発達は年齢と学習の相互作用によって起る現象といえる。

② 発達はすべての人に起こる現象

発達の速度や様相は、個人の生育環境、時代、個人の持つ条件や特性によって異なり得るが、すべての人は発達する。

③ 発達は生涯続く過程

現在の発達心理学では、発達とは、受胎から死に至るまでの心身の形態や機能の成長・変化を意味する。発達は一時期の出来事ではない。生涯にわたる時間的流れを背景としている。したがって、人間は生涯発達しつづけるという、生涯発達の考え方にもとづいて、それぞれの発達の段階の意味を理解する。

「過程」とは時間的経過だけを意味するのではない。「過程」とは目標に向かって「前進する」という意味を含んでいる。生涯発達心理学において仮定する生涯目標とは、一人一人の自己実現である。自己実現とは一生涯かけて人が目指す課題である。

④ 発達は成長（獲得）と喪失（衰退）とが結びついて起こる過程

発達は獲得と喪失のダイナミックな過程である。獲得・成長のみに見える幼児期や児童期も、実は喪失の側面を持つ。成育環境や個人の持つ条件や特性に対応して発達させられる特徴があると同時に、その他の方向性や可能性は喪失する。その意味で、各段階も目標を設定する意味があり、たとえば、成長段階では多様な経験が子供の可能性を伸ばすための重要な教育的機能となる。

⑤ 発達には漸次性があると同時に、連続的（蓄積的）な側面と不連続（革新的）な側面の両方が機能して起る過程

発達には、単純な内容から複雑な内容へ、具体的な対象から抽象的な対象へ、概念的レベルの低いものから高いものへ、という方向で、連続的に進行・蓄積され、徐々に変化する側面がある一方で、連続性のない革新的な変化も起こり、その両者が機能して発達は促進される。

⑥ 発達は個人内では可変性がある

個人の生活条件と経験することがらの内容、接する人や情報によって、個人の発達の仕

方や道筋は様々な形態を取り得る。したがって、例えば学校段階や学年としての目標は同じであっても、その目標に達する道筋や行動は個々人で異なり得るので、支援の過程では個々人に注目することが重要となる。

⑦ 発達とは社会的環境との相互作用の中で起こる

個人の発達は、歴史的、文化的、社会的条件によってきわめて多様であり得る。したがって、どのようにして個人の発達が進むかは、社会的・文化的環境条件とその後の変化・推移によって著しく影響を受ける。その意味でキャリア教育の実践においては、児童生徒の成育環境とその社会の将来像に対して強い関心を向けながら、今すべきことを決める必要がある。

(2) 学校段階における児童生徒のキャリア発達課題

上述したように、個人の発達は生涯にわたる過程である。その発達過程は年齢に伴って自然と起こることではない。年齢と学習の相互作用によって起こる変化である。言い換えれば、年齢に適した学習が実践されることによって発達は促される。キャリア教育の実践において、キャリア発達段階を基本的な考え方とする理由は、キャリア教育の目標である「社会人・職業人として求められる基礎的・汎用的能力の育成」は「年齢と学習」によって連続的に徐々に発達させられるものであるという人間の発達のメカニズムに注目したことにある。

人間の全人格の発達を促すことを目的とする学校制度が、年齢と学習の組み合わせを枠組みとして全教育活動を構成しているのと同じである。特に学校段階は、発達の諸概念を行動化し、効果的に児童生徒の発達を促すために、年齢を基礎とした段階に則って、学校制度を構築し、カリキュラムを構造化している。具体的な教育活動はそれぞれの目標を達成するために、発達の段階ごとの発達課題を設定することによって、発達の連続性と不連続性の両面を実現できるように計画されている。連続的側面は、段階（学年）間が継起的につながっていることを意味し、不連続的側面とは、各段階に質的に異なる飛躍的転換があることを仮定して、段階に固有の課題、すなわち発達課題を設定することをもって、発達を促進することを意味する。

児童生徒にとって発達の段階を考慮する意味は他にもある。それは、学校生活は児童生徒にとっては初めての社会であり、学習を通して発達するという目的を共有する生活に入る。ある意味で、将来実際に自立して生きる社会の原型が学校である。背景は様々であっても年齢が同じであるということで、最も易しい状況で自立するための基盤となる力を発達させられる。このように考えると、小学生の発達課題は、学校という社会の中での様々な学びを通して発達していく過程に即して、自立的に生きるために必要な基盤となる能力

を育てることが中核となると言える。

発達の段階についてはいくつもの理論があり、それぞれ特徴がある。しかし、それらの中でも、ドナルド・スーパーの提唱した生涯キャリア発達段階論とそれぞれの段階で達成する課題は、各学校で具体的な目標を考えるので参考になるであろう。たとえば、小学生段階は「空想期」と呼ばれ、その段階の発達課題は自己を大人の世界に関係づけることであり、空想の中で自分の役割を考えられることとしている。空想期の課題の達成は、その次の興味期（好き・嫌いという側面から希望や活動を評価する力を育てるという課題を果たす時期）と土台となり、その次に能力期（できる・できないという能力面から自分や活動を見る力を育てるという課題を果たす時期）へと積み重ね、中学を卒業する頃には、憧れ、興味、能力の三側面から自分と活動を見ることが出来る力を獲得する、という意味である。スーパーは児童期の心理的発達をめぐる調査研究とアメリカの学校制度を背景にして彼の理論を構築している。

日本においては、基礎的・汎用的能力というとき、それぞれの学校が、何歳ごろに何ができるようになってきているのかを把握し、また、何ができるようにしたいのかを明確化する必要がある。その上で、学校・学科や地域の特色を踏まえつつ、各学校段階での他の諸教育活動と照合して、段階別の達成目標を設定し、さらに、児童生徒の内での他の特性（知的な力、社会性、心身の成長の状況、学習を含めた諸活動等）の相互関係を考慮しながら、一人一人の児童生徒の具体的な目標を設定する必要がある。

その際、一つの参考となるのが、平成14年に国立教育政策研究所生徒指導研究センターがとりまとめた研究報告書『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』が提示した次のキャリア発達についての捉え方（表5-1）であろう。各学校においては、これを固定的な標準として理解するのではなく、それぞれの学校において育成すべき「基礎的・汎用的能力」の目標設定のための議論の糸口の一つとして活用していただきたい。

表5-1 小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達

小学校	中学校	高等学校
進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
<ul style="list-style-type: none"> ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく勤労観、職業観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての勤労観、職業観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加

国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』から一部改訂